

1-1 品詞とその役割

1 まずは「品詞 (びんご)」から

英語の文は単語がいくつか集まってできています。その一つ一つの単語を、その文の中での使われ方や意味を元に似た性質のものをまとめていくと、いくつかのグループに分けることができます。たとえば、book や house は「物の名前」を表すグループ、walk (歩く) や eat (食べる) は「動き」を表すグループ、のようになります。この「似たような使い方をする単語のグループ」のことを「品詞」といいます。品詞の例をあげてみましょう。

【品詞の例】

- 名詞: book, water, education (教育), Tom, Sunday, Japan
- 形容詞: kind (親切), beautiful (美しい)
- 動詞: eat (食べる), is (~である), sleep (眠る)

ところで、品詞って全部でいくつあるのでしょうか？ 実は品詞の数は言語によっても違いますし（たとえば、日本語と英語では品詞の数が違います）、英語でも分類のしかたによってその数が違います。ただ現在、日本で最もよく使われている分類方法では「英語には8つの品詞がある」ことになっています。

【英語の8品詞】

名詞、代名詞、形容詞、副詞、動詞、前置詞、接続詞、間投詞

皆さんがふつうの（専門書ではない）英語の学習書を読むのであれば、ひとまずこれを覚えておけば十分でしょう。これらの各品詞の定義は、これから本書の中で少しずつ説明していきます。

さて、上の品詞の一覧を見て、「あれ？ 『冠詞』とか『助動詞』が

ないぞ」とか『関係代名詞』とか『不定詞』って品詞じゃないんですか？」と疑問に思った人はいませんか？

「冠詞」はそれだけで独立した品詞だと考えることもできますが、上の「8品詞」の考え方では、「冠詞」は「名詞」を説明する言葉ですから「形容詞」の仲間に入れて考えることになっています。同様に can とか may といった「助動詞」も「動詞」の一種として分類します。

それから、英語の勉強をしていると「関係代名詞」や「不定詞」のように、「ナントカ詞」と「詞」という漢字で終わる用語がたくさん出てきます。これらは単語を「文の中での使い方」や「形」によって分類したもので、品詞名ではありません。

【「～詞」で終わっても品詞ではない例】

疑問詞、関係詞、不定詞、動名詞、分詞、数詞、...など

たとえば、上の例にある「関係詞」は品詞名ではありません。p.170で詳しく述べますが、関係詞には「関係代名詞、関係副詞、関係形容詞」があって、「関係〇〇詞」の「〇〇詞」の部分がそのまま品詞を表しています。つまり「関係代名詞」の品詞は「代名詞」で、「関係副詞」の品詞は「副詞」です。もちろん、これらを別々に学ぶのは効率も悪いので、「関係詞」とひとくくりにして学習した方がいいことは確かです。一方で「関係代名詞と関係副詞の違いとは、まさに代名詞と副詞の違い」なのです。それぞれの品詞をしっかり意識しないと、この2つの違いがわかりません。

2 1つの単語に品詞は1つ？

以下の文で present という単語の意味と品詞を教えてください。

- What do you want for a birthday present?
- Please write your present address.
- Let me present our special guest.

それぞれの正解は、(a) の present は「プレゼント」の意味の名詞で、全体は「誕生日プレゼントに何が欲しい?」の意味。

(b) の present は「現在の」の意味の形容詞で、全体は「あなたの現住所を書いてください」の意味。

(c) の present は「紹介する」の意味の動詞で、全体は「スペシャルゲストを紹介します」の意味。(ちなみにこの場合は、(a) (b) と違ってアクセントが後ろにあり、/prɪzént/ となります(☞ p.213))

このように同じ present という単語でも、いろいろな品詞としての使用方法があります。この例からもわかるとおり、**単語の品詞は文の中で使ってみて初めて決まるのです**。そして、**ほとんどの単語は複数の品詞で使えます**し、品詞の数も、時代とともに増えたり(あるいは減ったり)します。たとえば、「携帯メール」は英語では mail とはいわず、ふつうは text message、あるいは単に text といいますが、今ではこの text が I *texted* him a joke. (私は携帯で彼にジョークを送った) のように動詞として使われ始めています。従来からあった単語に新しい名詞の意味が加わり、それが動詞としても使われるようになった例です。

3 品詞のあいまいさ

品詞の分類が、辞書によって違う場合があります。たとえば、a bus stop (バス停) の bus の品詞は何でしょう? stop (停留所) という名詞を修飾しているから bus は「バスの」という意味の形容詞、という考え方もある一方で、bus はあくまで名詞で、直後の名詞 stop を形容詞的に修飾している、という考え方も可能です。同様の例は、an *entrance* examination (入学試験) とか a TV station (テレビ局) など無数にあります。このように元々〈名詞+名詞〉からできている表現の1つ目の語を「名詞」と解釈するのか、「形容詞」と解釈するのかは意見の分かれるところです。

では、次の文の there の品詞は何でしょう?

Look at those people *there*.

(そこにいるあの人たちを見てごらん)

これも、there は意味的には people (人々) を修飾しているから形容詞だと考える人もいれば、あくまで副詞で、それが「形容詞的に名詞を修飾している」という考え方もあります。

This diamond is *worth* one million dollars.

(このダイヤは100万ドルの価値がある)

という文の worth も「価値がある」という意味だけから考えると形容詞っぽいですが、この語は上の例文のように、後ろに名詞(目的語)が置けるのです。そこで、「そういう使い方ができるなら前置詞に分類しよう」と考える辞書が多いのです。ただ、意味を考えると、ふつうの前置詞とは異質な気がします。しかも、more worth than gold (金よりも価値がある) のように more を前に置いて比較級(☞ p.063)を作ることでもできます。だから、『目的語』を置ける特殊形容詞」と書いてある辞書もあります。

このように、専門家の間でも見解が分かれているものは、柔軟に自分の理解しやすいようにとらえておけばいいでしょう。

4 「働き」とは

「品詞」とは別に、**語句を文の中で使ったとき、その語句がその文の中でどんな役割をしているのかを示す「働き」という用語**があります。「文の中での単語の使い道」と考えてもいいでしょう。では実際の例文で見てみましょう。

Paul often plays tennis after school.

(ポールは放課後よくテニスをする)

この文の各単語の品詞は次のようになっています。